千のうろこ

経済学部
経済学科 3年
加藤　昌

『傷ついた心の方がそうでない心より人間らしく美しいのではないか』

一　泥の中

目を覚ました時には泥をかぶり、川底のビンや缶と共に彼は日の光を忘れていた。浮かびあがる事のできない流れの中で、ただ水の力が自分を跡形もなく消し去り、大きな自然の中に還すのを願った。川底に足を踏み入れる人間などいないだろう。彼は見捨てられたもの達の様にそう思っていた。それに、たとえ誰かが川の底を顧みることがあったとしても、美しさを失った彼を拾い上げる事はないだろう。彼は美しいうろこを失い、もはや愛されるものとは言えないと自覚していた。

それでも流れに身を任せず、川底にへばる様に生きてきたのは、暗がりの中に見えるガラクタたちに親しみを感じてきたからだ。彼はそれらと共に、自分の事をかつて愛されたものであると思い、部屋の中にあった時にできた古傷を眺め、感傷に浸った。彼は多少の傷があったほうが良いとさえ思った。それは一種のナルシズムに違いなかったが、泥にまみれた自分はそこから日の世界に呼び戻され、磨かれる事はないと思った。

二　古びた傷の

沈んだ日々を独り過ごす青年は窓の外から見える他の明るい日常の中に入り、溶け込んでいく事はできないと思っていた。ただ、時間が経つにつれ、そうしているわけにはいかなくなった。周りはあわただしくなり、現実というものが音も立てず迫ってきた。

そんな中、青年のもとに同じく独りだけの彼はやってきた。青年の兄が祭りで金魚を手に入れ、『忙しい俺に変わって飼え』と水槽等と共に、わざわざ電車を二本も乗り継いでやってきた。

それは転機と言っていいのだろうか。ただ寂しく小さな袋にいれられた金魚は、青年の目には自分と同じものに映った。けれど、それと共に過ごす事に前向きにはなれなかった。日々沈み、光の下に出ることができない彼には、一つの命の責任を持つことはできなかった。

『だが兄の頼みだ。面倒をみよう』

彼は仕方なく水槽にそれをうつした。けれど真剣に向かいあうことはなく、金魚を他に移さず、雑に水を入れ替えた。

罰が当たったのだ。水面台一杯に金魚の赤い美しいうろこが散った。

水の中を泳ぎまわる姿を見る事もなく、心の沈みゆくままに水を替えている時、赤い姿は境を飛び越え、渦の中に落ちた。彼がその姿に気が付いた時には、水面台の底にある鉄の出口に金魚は体を半分飲まれていた。彼は慌ててそれを助けようとした。けれど、金魚は赤い姿のまま戻ることはなく、多くのうろこを奪われ、彼の手の中で跳ね回った。

『この命はあとどれだけ生きられるだろうか？』

まだ息のある姿を見て、ゆっくり水槽に戻すと金魚は前と変わらず泳いだ。うろこのない姿を見て、彼は諦める気持ちしか持てず、何もできそう

もないという重みが圧し掛かった。もうしてあげられる事はないだろう。けれど、そう思っても金魚はまだ泳いでいた。

『まだ何かできるかもしれない』

兄が持ってきた中に本があり、そこから今自分達がどういう状況にあるのかを知ろうとした。

《うろこが欠けた場合、そこから寄生虫や水カビが入り、体は膨張と変色をしたあと死に至る》

重い現実がそこには書かれていた。彼はもうあきらめることしか頭になかった。

『僕はこの子をどうしようか。安楽死。それが良いに違いない。でも、可哀そうだ。悪いことをした』

彼はそんな思いで金魚を見た。そこには以前の赤い姿はなく、まだら模様になった姿があった。彼は金魚を飼い始めた頃は思えなかったことを不意に思ってしまった。

『傷が無い姿より、傷ついた姿の方が美しいじゃないか』

そう思いはした。けれど、この金魚は時期に死ぬのだ。夜暗い中、彼は暗然たる思いで床に就いた。

＊

その次の日に大学の友人がやってきた。

「なんだ、金魚もただの白身魚じゃないか」

友人は金魚を見ながら、こんな冗談を言った。青年は友人に言った。

「僕はさ、その金魚のうろこが無くなって初めて、彼の事を美しいと思ったんだ」

友人は随分心配そうな顔をして、こう言った。

「何を美しいと思うにしろ、生きる為にうろこはなくちゃいけない。金魚や僕たちは障害のない世界で生きていくわけじゃないんだからさ」

「でも強さとして深紅の姿でいるより、まだらになって沈んでいる姿に魅力を感じるんだ。おかしいだろうか？」

友人は微笑をもって玄関に向かいつつ言った。

「まぁ、どう考えるのもありさ。けど、その金魚を死なせるわけにはいかないだろう」

「そうだな。努力してみるよ」

青年は無気力ながら友人を送りだした。友人だから見せたが、本当は誰にもこんな金魚など見せたくないのだ。見られれば、自分の誤りを見られてしまう。けれど、一切傷のない姿より美しいという思いに共感して欲しかった。これは友人に見せた甘えであり、大きな矛盾だった。

＊

本当は傷のない金魚を見たいはずだ。彼は自分自身にそう言い聞かせた。いつまでも、金魚の薬を買いに行く気になれない自分自身を、嘘で騙すしかなかった。金魚の薬がどこにあるのか、という事も問題になった。調べてみると千円以上することがわかった。

『こうなるのを選んだわけではない。けれど、傷を治すにはそれだけの代償を払わないといけないのか』

彼は目の前にいる金魚にそれだけの価値を見出しているか考えてみた。

ただ、ため息をつき、そうではない事に気が付いた。兄が勧めた。ただそれだけの理由で飼い始められた金魚だった。彼の中に、それを愛しく思う心があるはずもなかった。

手が届くところに薬があるというのに、彼はその前で立ち尽くし手を伸ばそうとはしなかった。

『昔は命をもっと大切にしていたはずなんだ』

彼はそう思うと、より一層気が沈んだ。でも沈み過ぎないのは、それが金魚だからだろうか？その命は人間ほど大切にされることはない。だが、そうであれば、傷ついた体に手を差し伸べることも容易くできるはずだ。また兄の本を必死になってめくった。古くから金魚の薬として『塩』が使われてきたと書かれていた。

『塩か、淡水魚だというのに』

水槽に塩を入れるという事に恐怖を感じつつ、彼は塩を持ってきた。量を計る方法がなく、目分量で水槽に少しずつ落として行った。

「これで効くのか」

彼は塩の効果を疑った。彼はもう少し多めに塩を入れることにした。

そしてトボトボと増やしていくと、金魚が跳ねるように暴れ回った。彼は『やってしまったな』と思いながら、水道に行き、急いで水を流した。そして、蛇口をひねり、水を入れると金魚は静かになった。そして、カルキ抜きを入れて、座り込んだ。彼は塩を入れるのがすごく怖くなった。カビはもっと怖かったが、その日はそれ以上、何かをすることはなかった。

＊

次の日の朝になって、金魚を見てみるとしぶとくも生きていた。うろこが無いだけで、特別弱っているようにも見えなかった。どうやら排水溝に流れたときには、表面のうろこが剥がれるだけの怪我しかなかったようだ。

彼はこのまま金魚を見捨てようかと考えた。塩を試す度胸もない上に、たとえ治ったとしても、いつか同じように苦しむのだ。それなら、いっそここで死んだ方がいい。簡単な終わり。それは感傷に浸るしかない彼には魅力的なものだった。だが、それでは今までの考えと違いすぎていた。彼は金魚に傷があっても美しいのではないかと思っていたのが、知らぬ間に傷つくなら死んだ方がいいと思っていたのだ。

「苦い薬は嫌なのか？傷ついたままは嫌なのか？ただ美しいだけでは満足できないのか？」

もとの道に帰るために、独りの部屋で問いかけた。答える者の無い問いのあとで、彼はやるべき事を見つけた。

彼は再び台所に行って、塩を手にした。依然、目分量でやるしかなかったが、今度はコップで水に溶かしたものを少しずつ水槽の中に入れることにした。それに合計量も昨日の三分の一程度に抑えた。

彼はコップに塩と水を入れ、指でかき混ぜると水槽にゆっくりと入れた。トボトボと音を立てながら塩水は水槽の中の水と交じりあった。それを数回繰り返した。もういいか、と思ったとき、最後にカルキ抜きを入れた。そして暴れていないかを時々確認した。そうしているうちに日が落ちた。

＊

次の日になると、一昨日来た友人がまたやってきた。

「いやー金魚が生きてたか。それは良かった」

「君の言葉のおかげかもしれない」

「そんな事ないさ。やっぱり君だからだよ。僕は君自身が弱っていて、誰かの面倒なんて見れないと半分思っていたさ。たいてい人間は弱っていたら金魚なんて投げ出す。でも、君は見捨てなかった。君なら弱っている存在を、自分の為にも見捨てないと思ったよ」

「僕はそんな人間かな」

「金魚がそれを示している。なんにしろ、金魚が生きててよかった。何をしたんだい」

「いや、塩をね」

彼は笑った。

「塩か。下ごしらえは十分だな。死んでも火葬にはするなよ。食欲が出るといけないからな」

そう言って彼は帰っていった。

友人が帰った後、青年は金魚がいつまで塩に耐える必要があるのか考えた。それに、金魚はうろこを取戻し再び赤く染まるのだろうか。そんな簡単な事さえ忘れるほど、彼は苦しみが続くと思っていた。彼は携帯電話で再び調べてみると、確かにうろこは再生するようだった。

頭の中で、赤く美しい金魚が力強く水を切った。

自分の道が再生の道へとつながっていることがわかった時に、彼は久しぶりに青空を見た気がした。失ったと思ったものは、返ってくるのだ。自分の生まれ備わった力で、かつての美しさを取り戻すことができるのだ。それは『傷の美しさ』で本当の願いを誤魔化すしかなかった彼には、どこか知っていたことのようでありながら、全く新しいことだった。

彼はその後、塩で魚が暴れる心配こそないものの、本来淡水魚である金魚が弱ることを怖れた。彼は金魚を失うと同時に何かを失うと思った。

『僕はここで金魚が死ねば何かを失くしてしまう気がする。まさか自分でもこんな気持ちになるとは思わなかった。僕は知らぬ間に本当に金魚を蘇らせたいと思っている』

彼は自分の中に金魚への愛情が芽生え始めたことを認めた。それはすぐに『傷の美しさ』を超えるほどのものではなかったが、間違いなく沈み込むしかなかった今までの彼に、再び青空のもとに出ようという気を起こさせた。

『この気持ちが大きくなっていくのだろうか。もう諦めて座り込む必要はないんだろうか。なら僕は本当に帰りたかった場所に帰れるだろう。そうだ僕は君と共に、また赤く染まってみせるよ』

それから、しばらくの月日、彼は水槽の水を毎日取り替え、そして塩を入れた。

三　空の夢

大きな濁流の中で大樹や瓦がひしめき合い、それに飲まれた人間は体中を打たれ、流されていく。その死の流れの中にかつていた事を忘れられないまま、若い男は濁流が流れている所からほど近い所に腰掛けていた。そして下を見下ろし、川の中を見ていた。木の軋む音や瓦がぶつかりあう音を聞いたり、自分の体が痛み、服も破けている所を見ると、その流れの強さというものを改めて知った。

彼は自分が濁流の中から抜け出した事に喜びを感じてはいた。そのまま進めば死に追いやられるような流れからは逃れることができた。けれど、その流れから出て、どこかに腰を落ち着けても、あの流れの中を忘れることはできなかった。彼はもう自分が元には戻れないと思い、諦めに染まった。

沈み込んだ今となっては、あの濁流も何か意味のあるものに思えた。彼は自分が濁流にのまれたことに何かしらの意味を見出したかった。そうすれば、諦める以外に何か道を見出すことができると思ったのだ。けれど、その糸口を見出すことができないまま、傷の痛みと濁流の轟音に耐えた。そうして長い間、川辺に座りこんでいるうちに、今の自分の悲壮こそもっとも美しいものであると思うようになった。

『でも、何があっても僕は帰りたい』

傷口を眺めるたびに、彼は死に行くはずだったという事を思い出した。けれど、それと同じくらい、自分は甦るに値する人間なのだと信じたいと思った。彼は理不尽な死の流れに飲まれた事を、『自分は生きる為にも一度苦しまなければならない定めだったのだ』と思うことで納得させた。その時、彼の心の中で光輝いたのが『傷の美しさ』だった。

『僕は濁流にのまれたからこそ、本当の痛みを知ることができたんじゃないだろうか。心が沈み傷ついた今こそ本当の美しさというものに染まれるんじゃないだろうか』

彼は自分でも立ち上がることができず、ただ『傷の美しさ』という染まりきることができない考えを抱きしめるしかなかった。その彼を助けることを世界の誰もしてはくれない。助けられる事がないものはみな見捨てられていると思った。

『でも本当に僕は濁流に流されただけの不幸な人間だろうか？僕はさっきまで《傷ついている方が美しい》とすら、思っていたじゃないか』

そう思っている時、濁流の中を赤い美しいものが、流れを切るように光った。彼はそれが濁流の中で痛みをこらえ、死にもの狂いで駆け抜ける姿を見て、惚れ惚れとした。そうして、こう口走った。

「どうか君がここを渡り、本来いるべき美しい大河に戻れるように」

彼がしばらく見つめていたあと、それは天に飛翔していった。その時、彼は自分もあの美しい姿を追うと決めた。

四　手紙

『僕は傷の中に美しさを見た。それは今から考え

れば、ただ空虚なものの中に身を浸す事で自らの存在を感じ取りたいというだけの事だったのかもしれない。でも、そうと言えるのは本来の場所と言える所に本来の姿で帰ってきたからだと思う。

君は僕を何度か励ました。君は生きる為にうろこが無くてはいけないと言った。その言葉の通り、僕は金魚にうろこを取り戻させ、そして僕も気が楽になった。だけど、あれから半年たってもうろこに赤い色が戻る事はない。もちろん、いつかは赤く染まるのだろう。けれどそれはまだ先の事だ。僕がそう思って金魚が完全に甦るまで待つことを決めた時に、一つわかったことがある。それは鮮やかさというものが、それだけでは生きる為には必要ないという事だ。うろこがどんな色をしていても、彼は生きていける。けれど同時に、鮮やかさというものは、それが漠然と美しいのではなく、赤く染まるまでの時間があるからこそ、鮮やかさでありうるという事だ。

僕は彼が初めて家に来た時、正直美しいとは思えなかった。けれど、彼が傷ついた時、美しいと思った。それは、僕が『彼は赤いだけではない』という事を知ることができたからだ。つまりさ。僕はまだらになった姿を好んだんじゃない。ただ『赤さ』というものを知らないが故に、その『赤さ』を知った瞬間の姿を美しいと思ったんだ。

その事に気が付いた今、僕は『傷ついた姿が美しい』とは言わない。だからだ。きっといつか君が知っていた昔の僕の笑顔を取り戻してみせるよ。それが僕にとってうろこを取り戻す何よりの事だからね』

五　千のうろこ

いま青年の手の中に小さいうろこがある。それはとても小さく、息を吹きかければ飛んでしまうだろう。彼はそれを見つめつつ、水槽の中の金魚にこう話しかけた。

「僕は自分の大切なものを失わなければ、自分が持っていたものの素晴らしさに気が付くことはなかった。そして、本来の姿の美しさというものにも気が付かなかった。鮮やかさを知る事はなかったんだ。

そして僕は鮮やかさを知ったこれからも、多くのうろこを失うだろう。それは僕自身があくまで危険の狭間で生きていくからだ。そして、僕は危険にめぐりあうたび、自らの本来持つ美しさに気付く。それはきっと、安全な大理石の上や上座に座っていてはできないことなんだ。

僕は望めば、安全な世界に一生身を置くこともできるだろう。そうするには苦痛が伴う努力が必要だろうが、今の僕には危険な世界に行かないことを選ぶ方に多くの苦痛を感じる。それはきっと、こんな小さな水槽に閉じ込められている君ならわかってくれることだと思う。君が生きるその中だけでなく、僕が生きる世界も狭い。そして知る事ができるものも限られている。それでもやはり大理石や尊敬の絨毯の上で知る事ができるものより、この危険な世界の方が多くのことを知れると思う。とは言っても、知ることができるのも、涙が伴うものだろう。でもそうであるならなおさら、僕にとっては安全な世界を選ぶ方が苦痛なんだ。僕は巨人となって屋根から頭を突き出して弱い立場の人を見下ろすより、暗がりの中からクモの糸を垂らす手元を見る方がいい。その人は本当に大きい人だろう。

でも僕たちの体は小さい。だから、きっと本当に大きな人に比べれば、うろこはないようなものだろう。なら、それはどれくらいだろうか？」

彼はしばらく考えた。そうして微笑んだあとこう続けた。

「正直、それは知りようもない。それでも、これからどんな苦難に出会って多くのうろこを失ったとしても、それでもその全てを取り戻してみせるよ。それが例え千に及んだとしても、それでも僕はそれを取り戻してみせる。そして、それを取り戻す千の世界で、千の美しさを見つけだすんだ」